哲学初歩

田中美知太郎著

岩波全書

哲学初歩

田中美知太郎著

岩波全書 115

田中美知太郎

1902年生.
1926年京都帝国大学文学部卒業.
西洋古典哲学を専攻.
京都大学教授を経て，現在，同学名誉教授.
著書：「田中美知太郎全集」(全14巻)
「ソフィスト」「ロゴスとイデア」「善と必然との間に」「ソクラテス」「古典への案内」「アクロポリス」「学問論」「古典学徒の信条」「人生論風に」「ツキュディデスの場合」「プラトン 饗宴への招待」「時代と私」
訳と註：「プラトン テアイテトス」「プロティノス善なるもの一なるもの」「ヘラクレイトスの言葉」「プラトン ソクラテスの弁明」(校註)「アリストパネス雲」「プラトン パルメニデス」「プラトン ピレボス」

哲学初歩　　岩波全書 115

1950年9月20日　第1刷発行
1977年9月22日　改版第1刷発行©
1980年5月20日　第4刷発行　　¥1300

著者　田中美知太郎（たなかみちたろう）

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京6-26240

印刷・三陽社　製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

改訂版を出すにあたって

この書物が公にされてからもう二十七年になる。この長年月の間さいわいにして本書は不断に読者をもち、多くの増刷を重ね、活字の磨滅などによって、一部に読みにくいところが出て来たので、新しく印刷し直すことになった。ただし内容は大体をもとのままにして、漢字や表現を今日の読者のためにやさしく書き改めることにした。また引用や参照の書名も、なるべく今日の読者が直接手にすることのできるよう、その出所を今日の事情に合わせて書き改めた。内容をもとのままにしておくというのは、書店側の注文でもあったが、わたし自身も久しぶりに本書を読み直してみて、これがそれなりに独立完結したものであって、後から手を加える必要のないものであることを知らねばならなかった。むろん完結といっても、それはすべてのことがここで言われてしまったという意味ではない。読者もすぐに気づかれるように、わたしは本書で哲学を固定したものとしてよりも、むしろ動的なもの、広大にして緊密な問題関連のうちにあって、われわれに安易な安住を許さないものであることを明らかにして来たつもりである。また前の版の「はしがき」にも言われているように、残された問題はたくさんある。その

一部はそれから後に書かれた『学問論』や『人生論風に』のなかで、いくらか進んだ取扱いをすることができたと思うのであるが、しかしまだまだ残された問題も多いと言わなければならない。しかしわたしが本書で示そうとしているのは、そういういろいろな問題に分散される以前の哲学の全体像というようなものなのであって、もしわたし自身の哲学体系というようなものを考えることが許されるとすれば、やはりそれはこの全体図の上に構想されなければならないだろう。しかしなんといっても本書は三十年近い昔に書かれたのであるから、今日の時代に合わないところが多々あり、そういう点では不足を感じられるかも知れない。しかし他面からすると、今日におけるわが国の哲学とこれを取りまく周囲の状況は、昔とあまり異ならず、むしろ悪くなったところも少なくないようなので、本書の今日的な意味はその点なお多分に認めてもらえるかと思う。

この改訂版を出すにあたって多くの友人たちの協力を得たのであるが、なかんずく北嶋美雪君には、原稿の書き直しから校正、索引の作成まで、いろいろな面倒を引き受けてもらわねばならなかった。ここに記して特に感謝の意を表することにしたい。

昭和五十二年(一九七七年)五月

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

はしがき

この書物でわたしは、哲学に関心をもちはじめた場合に、普通まず問題になるようなことがらを、若干選び出して、いろいろ考えてみることにした。むろん、ここに取り上げた問題が、すべての場合を尽すというようなことは言われない。この書物でも、最初の計画では、なお論理の問題、哲学史の問題、非哲学の問題、などを取り扱う予定にしていたのであるが、紙数の関係などもあって、それらは伏線的に、軽く触れられただけで、ほとんど全く取り扱われないでしまった。これらの問題については、また他の機会を待つことにしたいと思っている。ところで、ここに取り上げられた問題であるが、これらもまた、徹底的にこれを取り扱おうとすると、一つの問題の枠のなかには、おさめ切れないようなものになって、次から次へと、他の問題を呼び入れて、全体の問題関連が、必ずしも単純ではないことを、わたしたちに教えることになる。したがって、最初の「哲学とは何か」というような問いも、そこだけで答えられてしまうのではなく、最後の章まで、問題はやはり続いているものと考えなければならない。否、哲学の問題というものは、どんな初歩的な問題を取り上げてみても、それはいつも哲学の根本

問題につながっているのであって、早急にその答えを見つけることはできないと言うべきであろう。したがってこの書物も、何か公式的な結論を予定しておいて、そこへ読者を言葉たくみに案内するというような種類の、哲学入門書ではありえなかったのである。哲学はデマゴギーではないのである。むしろこの書物は、著者が読者と共に、いま言われたような、哲学の問題のつながりを辿ってみようとする、哲学初歩なのである。むろん、わたしたちはこのような、初歩的な問題探究においても、全くの案内なしでは、どうすることもできない。ただ漫然と人生や世界について考えてみたところで、わたしたちは哲学の中へ、どれほども歩み入ることはできないであろう。哲学には哲学の歴史があって、ギリシアの天才たちが、その第一歩を歩み始めてから、今日までの永い年月の間に、すぐれた先人たちの、踏みかためてくれた大道が出来ている。これが哲学の伝統である。わたしがこの書物のなかで、読者の思考を助けるために、ソクラテスの産婆術で言うところの、投薬や手当ての形で、いろいろと援用しなければならなかったものは、いずれもこのような哲学の伝統のなかからであり、特にまたその源流から最も多くを採ったのである。著者の私見をもってすれば、わが国の哲学界は、流行を追うことに急であって、哲学の正統を正しく受け容れることには、ほとんど勉強らしい勉強をしていないように思われる。むろん、この点に関しては、著者自身の勉強もきわめて不充分なものではある

が、しかし志すところは、哲学のこの正統にあるので、本書においても、その線にそって、読者と共に考えることを、できるだけ努力したわけである。したがってこの書物は、流行語の早わかり解説を求めるような読者のためには、失望のほか何も与えることはできないであろう。また不正確な歴史展望と、勝手な歴史評論にもとづいて、何か最新型の哲学的立場を、読者に提供したりするのも、本書の任務ではない。そのような哲学評論は、学界消息通の自己満足にはなっても、哲学とは何の関係もないことを知らねばならない。わたしたちは与えられた公式や図式に、無理やりわたしたちの思考をあてはめようとして、思想の難解を歎いたりするけれども、そのようなものは思想でもなければ、哲学でもないのである。ギリシア以来の本物の哲学者が、歩いてきた大道について見るならば、哲学の思想はもっと自由で、明るいものであることが知られるであろう。この書物の著者は、一人でも多くの読者が、このような哲学の公道を歩むようになるための、何らかの機縁がつくられることを、この貧しい仕事にかけて、心から希望したいと思っている。

――一九五〇、八、二二――

なおまた、この全書は参考文献を掲げる習わしになったけれども、この書物の、いまのべられたよう

な趣旨からいって、わたしは読者に対して、この書物のうちに引用されている哲学の古典のうちからでも、自分で面白いと思ったものを、直接に読まれることをすすめるに止めたいと思う。それらの古典に書かれてあることは、必ずしも意味の捕捉しやすいものとは限られず、読者自身の気持からも離れていることが多いのではないかと思われるけれども、しかしそのような距離を克服しようとする努力が、かえって思考の勉強になるのではないかとも考えられる。すぐに私たちが納得するような、今日の問題を論じた言葉だけに耳を傾けていると、わたしたちはいつまでたっても、自分たち自身の先入見や思想的盲点に気がつかず、自分の気に入ったようにしか、ものが考えられないで、かえって時流に乗る他の者どもに支配され、自分自身の本当に独立した考えをもつことが出来なくなるのではないかと恐れられる。そしてなお、これらの古典を翻訳によって読む場合には、他の外国語訳も併せて読む方が、理解の助けになることが多いと思われる。その他の場合でも、ドイツのものを英語で読み、フランスのものをドイツ語で読んだりして、思わぬ発見をすることもある。一国語だけの思考には、具体的なことを考えたりする場合、偶然的なものに捉えられて、余計な間違いが起りやすいことを知らねばならぬ。

目　次

改訂版を出すにあたって
はしがき
哲学とは何か ……一
——その根源的な意味——
哲学は生活の上に何の意味をもっているか ……五五
——生活と哲学との結びつき——
哲学は学ぶことができるか ……二二
——学問的知識と哲学的智——
哲学の究極において求められているもの ……一七三
——プロトレプティコスを中心に——
索　引

哲学とは何か

——その根源的な意味——

一

哲学という言葉は、かなりひろく用いられているようであるが、よく考えてみると、何だかわけのわからない、妙な名前だということになる。これが法律学だとか、社会学だとか、生物学だとか、天文学だとかいうのならば、わたしたちはこれらの名前を聞いただけで、それが何の学問であるかということを、だいたい間違いなしに想像することができる。しかしながら、哲学という名前だけでは、何の見当もつかない。まず哲という字からして、普通の言葉では、ほかに用いられているのをあまり見ないのである。これは智または賢の代りの言葉であると言われるが、しかしそれだけでは、哲学の意味がはっきりするとは言われない。わたしたちはこの言葉の意味をはっきりさせるために、少しばかりその由来をたずねてみなければならない。

言うまでもなく、これはそんなに古い言葉ではない。徳川末期の洋学者西周(にしあまね)(周助)(1829—

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

97)が、翻訳の言葉として、はじめてこの語をつくったと言われている。もっとも最初に用いられた言葉は、単なる哲学ではなくて、希哲学というのであったらしい。文久二年(1862)に作成されたと推定される、かれの講義案には、次のように言われている。

「ピタコラスといふ賢人、始めて此ヒロソヒといふ語を用ひしより創まりて、語の意は賢きことをすき好むといふことなりと聞えたり。此人と同時にソコラテスといへる賢人ありて、また此語を継ぎ用ひけるが、此頃此学をなせる賢者たちは自らソヒストと名のりけり。語の意は賢哲といふことにて、いと誇りたる称なりしかば、彼のソコラテスは謙遜してヒロソフルと名のりけるとぞ。語の意は賢哲を愛する人といふことにて、所謂希賢の意と均しかるべしとおもはる。此ヒロソフル(ソコラテス)こそ希哲学の開基とも謂べき大人にて、彼邦にては吾孔夫子と並べ称する程なり。云々」

ここではヒロソヒ(哲学・希哲学)とヒロソフル(哲学者)の二語に対して、後者ヒロソフルの意味を、「賢哲を愛する人」と解き、「希賢」と同じような意味であるとのべている。この希賢という言葉は、『太極図』の作者、宋の周茂叔(濂渓)(1017-73)が著した『通書』のうちに、

聖希天、賢希聖、士希賢

というのがあるから、その「士は賢ならんことを希ふ」を指して、「所謂希賢の意と均しかるべ

し」と言ったのであろう。当時の人々は、儒学の教育を受けていたから、このような説明によって、ヒロソフルというような洋語の意味を、比較的容易に理解することができたであろうと思われる。そしてヒロソヒに対しては、賢を哲に言いかえて、希哲学という言葉を当てたものと見ることができる。

この希哲学という言葉は、かれの学友津田真一郎(真道)(1829-1903)が、明治七年(1874)に『明六雑誌』第二号で公にした論説、『開化を進る方法を論ず』のなかにも用いられている。

「近今西洋の天文、格物、化学、医学、経済、希哲学の如きは実学なり。云々」

とあるのがそれである。しかし西周自身は、もっと早くから、希をすてて、単なる哲学という言葉を用いていたらしい。明治三年(1870)に創立された育英舎において、かれは西洋の学術全般についての講義を行なっているが、これに題して『百学連環』と言っていた。おそらくencyclopaideia の意であろう。その第二編殊別学の第二は、哲学論と題され、致知学(＝論理学)、性理学(＝心理学)、理体学(＝有論)、名教学(＝倫理学)、政理家哲学(＝政治学)、佳趣論(＝美学)、哲学歴史(＝哲学史)、実理上哲学(＝実証主義哲学)などを取り扱っている。哲学という言葉が、政理家哲学、哲学歴史、実理上哲学などの用語に見られるように、自由に用いられている。むろん、これは西周の用語であって、これがそのまま直ちに一般に通用したわけでは

ない。ほかに性理学とか、窮理学とか、理学とかいう言葉も行なわれており、明治三年(1870)の大学規則には、文科の科目のうち、哲学はヒロソヒーと仮名書きされている。しかしその後、次第に西周の用語「哲学」が一般に用いられるようになったらしい。明治十年(1877)創立の東京大学の学科名には、哲学という名前が用いられているし、同十四年(1881)同大学が発行した『哲学字彙』は、まさにこの名前を表題にしている。この哲学辞典におさめられている哲学用語の大部分は、西周の造語であると言われ、今日普通に用いられている言葉、例えば論理学、心理学、倫理学、美学などの学名から、現象、客観、主観、先天、後天、観念、実在、帰納、演繹、総合、分解(分析)など、多くの術語がかれに帰せられている。

これらの歴史に興味をもたれる読者は、麻生義輝『近世日本哲学史』(近藤書店、同リプリント版、宗高書房)のすぐれた歴史的叙述によって学ばれることをすすめたい。以上にのべられたことも、同書に従っている。

しかしながら、これによって見れば、哲学は希哲学としてのみ意味をもちうるのであって、哲学という半分の言葉だけでは、何らの意味もありえないことが知られる。哲学という名前が、何かわけのわからない、妙な名前である所以も、まさにそこにあると言うことができるであろう。だから西周も、例の『百学連環』のなかで、哲学について説明する時には、次のごとくに

言っている。

「Philosophy なる文字の Philo は希臘の φιλο にして、英の Love 愛なり、又 Sophy は σοφία にして、英の智 Wisdom なり。其意は賢なるを愛し希ふの義なり。……ヒロソヒーの意たるは、周茂叔の既に言ひし如く、聖希天、賢希聖、士希賢との意なるが故に、ヒロソヒーの直訳を希賢学となすも亦可なるべし」

すなわち哲学はもと希哲学であり、直訳的には希賢学だったのである。そして多くの人々にとっては、希賢学の方がはるかに親しめる名前であったであろう。しかし西周は、むしろ希哲学の方を採り、さらにこれを哲学と略称したのである。そして人々もまたこの名称を採ったのである。その理由はおそらく、性理学や窮理学、あるいはその略称たる理学が採られなかったのと、同じ理由によるのであろう。これらの名称は、宋儒の言葉に親しんでいた当時の人々にとって、たしかにわかりやすい名前であったに相違ないけれども、それだけまたすでに陳腐となっていて、西洋の新しい言葉の意味を伝えるのには、かえって不適当に感じられたのであろう。かくて希賢学もまた、周濂渓の『通書』から採られて、儒学の考え方が入り過ぎているので、かえって避くべきものと思われたのであろう。賢といえば聖を思い、智といえば仁を考えるというように、漢学の連想に束縛されることは、むしろ好ましくないので、このような引っ

かかりの少ない哲の字を採って来て、希哲学の名をつくったのであろうとも想像される。この哲の字は、その意味から言えば、智や賢と同じような意味のものであろうが、普通語にはあまり多く用いられない文章語なのであると言われている。したがって、わたしたちが哲学という名前だけでは、何のことか、すぐには見当がつかなかったのも、べつに不思議はないと言わなければならない。もっとも、漢学に親しむことの少ないわたしたちにとっては、哲学という名前は、最初の人たちにとってよりも、いっそうわかりにくいものになっていることは否定できないであろう。わが国の哲学は、すでにその最初の名称において、言葉の不明に苦しむ運命を暗示していると言うことができるかもしれない。しかしながら、造語の可否はしばらくおき、哲学をひとつの全く新しいものとして受け取った、かれら先人たちの感覚と、これを新しく言いあらわそうとしたかれらの努力に対しては、わたしたちも深い同情と理解をもたなければならないであろう。

二

かくて哲学は、もと希哲学であり、また希賢学であったのであって、西洋の言葉の訳語として、新しくつくられたものなのである。したがってわたしたちは、それが何を意味するか知ろ

うと思うならば、その原語について、これをたずねなければならない。それが、もとギリシアの言葉であることは、『百学連環』にも指摘されているとおりであって、そのことはすでに今日の常識となっている。むろん、ギリシア名前であっても、今日の新造語であるものも、決して少なくはない。しかし哲学は、すでに西周が文久二年の哲学講義案において指摘しているように、ソクラテス(Sokrates, 前469/470-399)をその開基とし、ピュタゴラス(Pythagoras, 前531頃)によって初めてその名前が用いられたとも言われている。哲学の原語「ピロソピアー」(φιλοσοφία, philosophia)は、ギリシア語としてのみ意味をもつ言葉であって、ローマ人以下、近世のヨーロッパ人は、その発音をローマ字に写して、これをギリシア語のまま伝え受けているのである。これは永い歴史を経て、かれら自身の間でも、重要な意味をもった言葉になっているけれども、そのもとはかれら自身の言葉ではなく、そのかぎりにおいては、かれら自身の言葉で意味を解くことのできない、やはり一種わけのわからない言葉であったと言うことができるであろう。それはギリシア人の言葉としてのみ、直接に有意味であり、ギリシア人によってつくられ、ギリシア人によって実際に用いられた言葉なのである。かくてわたしたちは、哲学の意味を、その原語の起源にさかのぼって、それが何であったかを確かめてみなければならない。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo